

エッセイ 中東奮闘記－湾岸50年、オイルマンの軌跡

第三回 オマーン初訪問

遠藤晴男

(日本オマーンクラブ名誉会長)

3-1 第一次石油危機 - トイレットペーパー騒動の後先

私が3ヶ月のテヘラン駐在を終えて帰国した1973年9月以降、世界石油情勢はさらにドラマチックな展開を見せた。

帰国後1か月ほど経った同年10月6日に、第4次中東戦争が勃発し、第一次石油危機を引き起こすことになったのである。

以下、4次にわたるイスラエルと周辺アラブ諸国との戦争と石油危機について概観する。

第1次中東戦争は、1948年5月15日に勃発した。国連の分割案にしたがって前日の14日にイギリスによるパレスチナ統治が終了しイスラエルが建国を宣言したが、その翌日に分割に反対する周辺アラブ諸国がイスラエルに侵攻して始まった戦争であった。

「スエズ戦争」と呼ばれた第2次中東戦争は、1956年10月29日に勃発した。1953年にエジプトが共和制に移行した後、エジプトと西欧との関係は悪化した。1955年にエジプトがチェコスロバキアと兵器購入協定を締結すると、中東への軍備供給の独占を崩されたとしてフランスがイスラエルに武器を売却し、イギリスとアメリカはアスワン・ハイ・ダムへの世界銀行の融資の撤回によって報復した。

こうした中で1956年に大統領に就任したナセルは、同年7月にスエズ運河の国有化を宣言した。スエズ運河の権益を所有していたイギリスとフランスがこれに激怒、両国の働きかけを受けたイスラエルがシナイ半島に侵攻して始まった戦争であった。

この戦争でエジプト軍は総崩れとなり、イスラエルがシナイ半島の大半を占領した。同年10月にはアメリカとロシアの介入による国連の調停によってイギリスとフランスがスエズ運河の国有化を受け入れ、軍事的に敗れたナセルは政治的にはスエズ運河の国有化でアラブ世界の盟主の地位を獲得した。一方、国有化を飲まされたイギリスの凋落が明白になり、同国は1968年1月に「スエズ以東」からの撤退を宣言し、これが1971年までのイギリスのペルシャ湾岸や東南アジアからの撤退につながった。

「6日戦争」ともよばれる第3次中東戦争は、1967年6月5日に勃発した。

5月のエジプト軍のシナイ半島への進出やチラン海峡閉鎖を口実として、イスラエルがエジプト、シリア、イラク、ヨルダンの空軍基地を攻撃した。これによってアラブ側は制空権を失い、地上戦でも敗れた。イスラエルは同月8日にはヨルダンとエジプトと、同月10日にはシリアとも停戦した。この戦争はイスラエルの完勝で、ヨルダン川西岸地区、ガザ地区とシナイ半島、ゴラン高原を手中にし、ナセルの威信は決定的に低下した。

第4次中東戦争では、第3次中東戦争でイスラエルに奪取された領土の奪回を狙って、エジプトとシリアがスエズ運河やゴラン高原に展開するイスラエル軍に対して攻撃をしかけた。開戦日の1973年10月6日は、イスラエルでは最大の休日の一つの「贖罪の日」、一切の労働が禁止されて断食をしなければならない日であった。不意をつかれてイスラエ

ル軍は当初は苦戦したが、やがて盛り返し、国連決議で停戦となった10月22日時点では逆にエジプト・シリア領に侵入し、優位に立っていた。

同月8日にサウジアラビアのヤマニ石油相やイランのアムゼガル蔵相がウイーンでメジャー代表者と価格アップ交渉を開始したが決裂し、同16日にペルシャ湾6ヶ国は一方的に公示価格を70%引き上げた。この結果、アラビアン・ライトの価格は、3.011ドルから5.119ドルになった。石油メジャーとの価格の相談をやめた産油国が、原油価格の決定権を手に入れた瞬間であった。

さらに、翌17日にOAPEC（アラブ石油輸出国機構）10ヶ国は①イスラエルが1967年に占領したすべての地域から撤退し、パレスチナ人の合法的な権利が回復されるまで、原油の生産を9月水準に対して毎月5パーセント削減する。②友好国には、生産削減以前と同量の石油供給を保証する、③敵対国であるアメリカとオランダへの石油輸出を全面禁止することを決議した。

いわゆる「石油戦略」の発動であった。

「イスラエル一辺倒の中東政策を変更して欲しい」というサウジアラビアのファイサル国王の要請は、アラムコを通じてまた幾度もの直接の接触によって早くから米国政府に伝えられていたが、イスラエル・ロビーの影響の強い米国政府はイスラエル支持を崩さなかった。また、「要請が受け入れられないと、なんらかの措置をとらざるを得ない」という警告も無視されていた。

アメリカがイスラエルへの22億ドルの軍事援助を行うと発表した翌20日にサウジアラビア政府は、ついに対米石油の全面停止を公表した。ここにたって、ファイサル国王はアメリカ側に立つことは出来なかったのである。

これにより、「石油の中に浮かんでいた」世界は、一気に大混乱に突入した。第1次石油危機の発生である。この時に、アラブ側が認識した友好国とは、アラブ諸国に対して軍事援助をしている国か、イスラエルと断交、または国交のない国に限られるという厳しいもの、具体的には英、仏、スペイン、オーストラリアなどに限定されていた。日本は友好国とはみなされなかった。

同年11月5日に、クウェートでのOAPEC閣僚会議では、「11月の石油生産量を9月比で25%削減し、12月以降は毎月5%ずつ削減を上積みしていくという厳しい方針を決めた。

同月初めにナイジェリアがバレル当り16ドルで原油を売り出すと、世界中から100社近くが殺到した。1970年代に入ってから産油国の攻勢で国際メジャーさえも石油の安定確保に躍起となっていたが、とくに供給源の乏しい独立系石油会社は産油国が実施する石油の入札を必死に追いかけた。

同年12月にNIOCが初めて実施した原油の入札では、バレル当り17.40ドルの高値がついた。また、同月23日のテヘランでのOPEC会議の結果、1974年1月から原油価格を2.12倍に引き上げることを決め、アラビアン・ライトは前年初めの4倍の11.65ドルに引き上げられた。

エネルギーの太宗を石油に依存し、石油のほぼ100%を輸入していた日本。石油は低廉で豊富なエネルギーであると信じ、まさか日本が非友好国と認定されると思ひもよらなかった日本。当時日本の輸入量の60%を供給していた頼みの国際メジャーにも、アラブ諸国

の値上げと削減をそのままわが国に通告されて、日本は一気に混乱状態に陥った。

日本国内では新聞・テレビなどが連日石油危機を報道。国民の物不足と物価騰貴への不安をかき立てた。11月1日には大阪の千里ニュータウンのスーパーマーケットに主婦たちが押しかけてわれ先にとトイレトペーパーを買い漁り、棚が空になるような状況となった。買い占めの動きは12月に入って洗剤、塩、しょう油、灯油などにも広がった。

政府は、11月には石油の総需要抑制と物価対策の強化を目的に、「石油緊急対策要綱」を閣議決定し、これに基づき「民間における石油・電気の諸王削減の実施要項」を決定し実施したが、あまり成果は上がらず、石油不足が起こり価格も高騰した。長年業績不振に苦しんでいた石油会社業績改善のための「千載一隅のチャンス」と言ったことが広まり、12月には通産省トップが「諸悪の根源は石油会社」とヒステリックに叫ぶというような事態にもなった。12月に一般企業の石油の20%削減」と大口需要家を中心とする電力の20%削減」を内容とする「第2次石油対策要綱」の発表によって、町からはネオンが消えた。

まさかの「非友好国」扱いに困惑した日本政府は、11月22日の閣議で外交方針を急遽パレスチナ支持に転換し、「イスラエルによるアラブ領土の占領継続に対する遺憾の意」を表明した。

また、友好国扱いを求めるべくこの意を直接にアラブ諸国首脳に伝えて石油供給の制限を緩和して貰うべく、三木副総理を政府特使として中東産油国に派遣した。同特使は12月10日に羽田を発ち、アラブ首長国連邦、サウジアラビア、エジプト、クウェート、カタール、シリア、イラク、イランを歴訪して、12月28日に帰国した。「油乞い外交」などと陰口を叩かれる始末であった。

日本は、三木副総理が外遊中の12月25日のO A P E Cの会議で友好国と宣言をされて、石油の供給量を9月水準に戻すことができた。

その時の裏話を吉田祐司の記録にしたがって紹介する。

このO A P E C会議の席上、U A Eのオタイバ石油相が「日本を友好国扱いにすべきである」と発言した。会議の他の出席者から当初は賛成とも反対とも積極的な発言がなかったが、そのうちにクウェートの代表がオタイバ提案に反対を表明し、両者の間でかなりの激しいやりとりがあった。クウェート代表からはオタイバ石油相に対して「お前は日本のエージェントか」という言葉も投げかけられたと言う。これに対してオタイバ石油相は「わが国でも日本の石油会社がメジャーが見向きもしない油田の開発を手掛けて貢献している。カフジで操業している日本の石油会社もクウェートに貢献している。お前は、どれだけ日本のことを知っているのか。私はこの数年、年に1回は日本を訪問し、その都度日本の首相や閣僚と会談している。日本がパレスチナ寄りの姿勢を持っていることを私は十二分に理解している」と反論し、結局、その会議で日本は友好国扱いになった。オタイバ石油相の発言がなければ日本の友好国扱いはなかったというのである。

オタイバ石油相は1969年にバグダード大学を卒業してU A Eの石油大臣のポストに付いたが、欧米の石油会社は英語もたどたどしく、石油の専門的知識も乏しい名もないこの若者を冷たく扱った。一方、当時アブダビ石油に出向していた先述の吉田祐司らの日本人は誠意をもってオタイバに対応していたので、オタイバは時々夕方にアブダビ石油のキャンプをふらっと訪れ、食事をともにし、将来の国造りの夢を語ったという。吉田らは彼

を励まし、来日の時には、天皇陛下や首相、閣僚らとの会談をセットし、慶応大学からの名誉博士号の授与も仲介した。UAEの石油相などは日本では見向きもされなかった時代のことである。吉田らとの交流を通じて、オタイバに親日感が芽生え、大親日家になり、OPECの日本の友好国認定にも資したことは間違いない。民間の長年に亘る地道な努力が大きな国益につながったのである。

以上は、吉田祐司がオタイバ石油省の秘書官から聞いた話として記している。

3-2 オマーンへー石油開発は男のロマン

石油危機の余韻もまだ醒めやらぬ1974年5月、私と丸善石油のエンジニアの小川は、ニチメンの清水ベイルート支店長、大村ロンドン駐在員、東京本社の石油担当の北川らとベイルートの海辺のイタリア料理店「スパゲッテイ・イタリアーノ」の窓辺の席に座っていた。こじんまりしたこの店は、味の良さでベイルートで評判の店であった。

「このスパゲッテイ、おいしいですね」、「このワインは何？レバノン産のクサラ・ロゼですか。飲みやすい！大村さん、もう一杯どうですか？」、「私は、次はオッソー・ブッコーにします。清水さんは何にします？」などと、私たちは日本にいる時とは大違いの豪華な昼食をゆっくりと楽しんでいた。

窓越しの眼下には、初夏の日差しの中できらきら光るコバルト・ブルーの地中海が広がっていた。当時のレバノンは「中東のスイス」、ベイルートは「中東のパリ」といわれ中東の中心都市であった。アラビア半島の辺境の国オマーンに滞在した心身の緊張と疲労がひとかけらずつはがれ落ちていくのを感じていた。

私たちがオマーンに入ったのは4月下旬。東京から香港、バーレーン経由の長旅であった。オマーンに製油所建設計画があるとの情報をニチメン・ロンドンがキャッチし、このフイージビリティスタディ(FS)の作成を丸善石油に依頼してきた。私と小川は、その現地調査のためオマーンに派遣されたのだった。われわれにニチメン勢3名との総勢5人のグループであった。

大正時代に地理学者の志賀重昂がオマーンを訪問し、タイムール国王に面談した。この縁でタイムール国王が退位後に日本人女性大山清子と結婚して神戸に在住し、2人の間にブサイナ王女が生まれたことは、一部の日本人には知られていた。

また、1967年に日本への石油輸出が始まっていたことも、石油会社関係者には知られていた。しかし、日本とは深い縁のあるオマーンは、鎖国政策をとっていたこともあって、当時の日本ではまだ馴染みの薄い国であった。

カブース国王がクーデターで父親である前国王（ブサイナ姫とは異母兄弟）を放逐して政権を握ったのは、1970年7月23日。私たちがオマーンを訪ねたのは、オマーンが外国に対して注意深く海外に門戸を開き始めてまもなくの頃であり、南部のドファール地方では王政打倒を目指す反乱が続いていて、国の先行きにはまだ不透明感が漂っていた頃であった。

私たちがマスカットに到着して、オマーン開発省の役人の出迎えを受け、当時唯一外国人が泊まれるアルファラジュ・ホテルに着いたのは、夜中の11時過ぎ。

チェックインしようとする、「部屋が空いていない」と言う。「予約してある」と案内し

た役人がねじ込んでも、ホテル側は「ないものはない。ロビーで待て！部屋が空いたら、連絡する」の一点張り。

当時の湾岸地域は、石油とオイルマネーを求めて世界中からビジネスマンが殺到していて、飛行機もホテルも何もかも足りない時代であった。「ようやくのことで飛行機に乗り込んでシートベルトを締めたら、シェイク（長老）が乗るから、お前は降りろと言われた」というような話が当たり前であった。

夜中の1時過ぎになって、ホテル側から「このホテルには2人しか泊まれない。あとの人はマトラ・ホテルに行ってくれ」と言われ、私と小川、それにニチメンの清水ベイルート支店長の3人が、午前2時過ぎにインド商人らが泊まるマトラ・ホテルになんとかチェックイン出来た。しかも、私と小川は相部屋であった。

真夜中に惨めな気持ちでマトラ地区へ移動する車の窓から見上げたオマーンの峩々たる山の峰々の上に広がっていた煌々たる星空の光景はいまも忘れられない。

翌朝起きて外に出ると、ホテルのすぐ前の海は入江。埠頭もなく、ただの砂浜だった。右手には、マトラの町が湾一杯に広がっていた。入り江には外海から、ポンポン蒸気の漁船が港に帰ってきて、男たちは海に入り獲れた魚の入った箱を船から下ろし、浜辺に並べていた。売買もしていたように思う。女性もいた。ここでは他の湾岸諸国とは違い、女性も働いていた。

湾を囲む山の頂には、16世紀から17世紀半ばまで150年に亘ってこの国の湾岸部を支配したポルトガル人が建てた円形の砦が点在し、町を見下ろしている。ホテルの背後を見ると、切り立った岩山が迫っている。ここには山があった。オマーンの風景は、砂漠や土漠だけの他の湾岸諸国とは異なるものであった。

その日はアルファラジュ・ホテルに集合して打ち合わせを終えてから、件の役人の案内で、開発大臣を表敬訪問した。開発省は小さな白っぽい小さな建物であったと記憶している。部屋に入ると、大臣もお付の役人も、腰に刀を帯びている。「ハンジャル」という半月形の短刀。日本の江戸時代のように感じた。

製油所建設については後日F Sの結果を提出することにし、オマーン滞在中にそのためにオマーンの石油関連施設を見せて貰うことになった。

まず訪れたのが、マスカットから西約300キロのサウジアラビアとの国境近くにあるファフード油田。私たちはここで原油を生産しているシェル社のプロペラ機で行くことになった。

マスカット空港で、機の最後尾にかけられたタラップを駆け上がってわれわれは飛行機に乗り込んだ。かなり年季の入ったオンボロ飛行機、乗客は、油田で働く人びとを入れて10数名。油田は女人禁制、女性の姿はなかった。

「この飛行機で大丈夫かな」と私には一瞬不安がよぎった。マスカット空港を飛び立ち高度を上げた飛行機は、緑が広がるバーティナ地方の上空を左に旋回してすぐに山岳地帯にさしかかった。イランのザグロス山脈ほどの恐ろしさはないが、ここも一木一草もない岩山だけの風景。巨大な乾いた岩の断崖が強い太陽の光に照らされて聳え立っていた。

トイレは飛行機の最後尾にあった。私が用を足した後に、トイレに入ったニチメンの大村が用を済ませて座席の方に歩き始めた時に、「バターン」という大きな音とともに最後尾の飛行機の出入り口がポッカーリと大きく開いた。

私がトイレから出た後に最後尾の窓から外を覗いたり、軽く身体を動かしたりしていた時にこの事態が発生していたら、私は眼下の岩山の彼方に転落していたのは間違いない。オマーンの奥地で一卷の終り、間一髪のところであった。目を丸くして驚いていた大村とお互いの無事を喜び合った。

最後尾がポツカリと空いてしまった飛行機から下が丸見え。操縦助手がかけつけてきたが、空中で降りてしまったタラップはどうすることも出来ない。飛行機はマスカット空港に戻るようになった。墜落の危険を避けるためか、マスカットまでは低空飛行となった。「こんな山の中で墜落したら、捜索隊も入れないから見つけてもらえない。なんとかマスカットまで無事に飛んでくれ」と私たちはひたすら祈った。

無事戻ったマスカット空港で最後尾のタラップを閉め、再びオマーン内陸部の山岳地帯を越えて、ファフード油田に着いたのは夕方近く。飛行場すぐ近くの油田事務所と従業員宿舎は岩石だらけの広場に面して立っていた。背後は切り立った峩々たる岩山。

さっそく、シエルの技術者の案内で油田を見ることにした。事務所から歩いて立った所は、下が3、40メートルの断崖になっている高台。そこからは、地平線まで180度一望できた。地平線まで、土漠が続いていた。

大村が、「これ、化石です」と拾った石を見せてくれた。見ると、足元の岩場のあちこちに二枚貝などの化石がゴロゴロ転がっている。2億年前から1億8000年前にパンゲア大陸が北のローラシア大陸と南の Gondwana 大陸に分裂したことで、その間にテチス海が誕生し、この中央海嶺では火山噴火や熱水活動とともに海洋地殻が生み出された。9500万年前になると、Gondwana 大陸から切り離されたアフリカ大陸や当時これと地続きだったアラビア半島やインド亜大陸を乗せたプレートが北上を始める。このプレートとテチス海の海洋プレートが衝突し、この海洋プレートがアラビア半島部分に乗り上げた。テチス海という海の底であった部分が乗り上げたのだから、この奥地に化石があって不思議はない。

いくつかの貝を拾い上げて改めてあたりを見渡すと、正面の地平線の彼方からこの高台の先までの土漠に油井の列が一直線に延々と続いていた。イギリス人エンジニアが「IPC（イラク石油）の子会社のPDO（オマーン石油会開発会社）が石油を求めて掘り続けたが、結局石油が見付からず、断念した空井戸の跡だ」と説明してくれた。

「あれが最後の空井戸のやぐらだ」と指差す。台地から左前方100メートルぐらいのところ。そこから約400メートル右、台地の右前方に1本ポツンと油井のやぐらが見える。「あれがファフード油田の第1号井だ」との説明を受けた。その距離、わずかに400メートル。「この間の地下に断層があり、それがこの非情な結果につながったのだ、これが石油ビジネスさ！」とそのエンジニアは説明してくれた。たった400メートルの断層が、「天国と地獄」を分ける。

私は、この奥地のファフード油田の丘に立って、オイルビジネスの真髓を噛み締めていた。非情だ。しかし、ここにはロマンがある。とてつもない男のロマンだ。私は夕日に映える延々と続く空井戸の列と出油した第1号井を見ながら、オイルマンとしての感慨に身動きも出来ないでいた。

その夜はキャンプに泊まり、翌日私たちは国境沿いから広がるルブアルハーリー砂漠に入ってみることにした。ルブアルハーリーはアラビア半島最大の砂漠であり、荒涼たるその風景は昔から「虚無の世界（Empty Quarter）」と恐れられてきた場所である。私たちはシエ

ルのエンジニアが運転する2台のジープでベースキャンプから一路西に向かった。周りはいつのか土漠から砂漠に変わっていた。

「砂漠の景色は刻々と変化する。前にあった砂丘が消えていることもある。見てごらん、あそこに風が吹いている。一本の草に風で舞い上がった砂が引っかけり、そこに砂が順次たまり、やがて大きな山になっていく。高い山は、700フィートの高さにもなる」とそのエンジニアは説明してくれた。目を凝らすと、なるほどはるか遠くに風が砂を空に舞い上げている。

ジープはその中の平坦な道をひたすら走った。アスファルトで固めた道である。当たり前のことだが、途中人っ子ひとりいなかった。基地を出て170キロほど走ったところで、砂に阻まれて車は走れなくなってしまった。道がない、先は砂の山ばかり。これ以上進むには歩くしかない。車から降りて、砂丘を登る。サラサラした砂に靴がめり込む。手で掬い上げた砂の粒子はひどく細かい。

右手前方には、それこそ700フィートはあろうかとも思える黄褐色の砂丘。アラビアの青い空によく映える。風が舞い、砂丘の頂上から稜線から砂が流れている。眼前からは延々と連なる砂漠と砂丘。砂だけの世界。美しい風景だった。

腰まで砂につかりながらもさらに分け入りたい衝動に駆り立てられたが、それは無理な相談、引き返さざるをえなかった。もう一度この地を訪れて中に入れることを願いながら、私は後ろ髪を引かれる思いでその場を離れた。

その後マスカットに戻り、1967年に初めて原油が積み出された港湾設備、原油貯蔵基地、製油所建設用地などの調査を終えた私たち一行は、大臣から舟遊びに招待された。

私たちが乗ったモーターボートはマスカット港から海岸に沿って一路南下した。4月下旬のオマーン、強い太陽の日差しの下での青い海。海好きの私にとっては、たまらないクルージングであった。やがて着いたところは、マスカットからは20キロ南のイティ海岸。ボートから飛び降りた浜辺には、大きな海亀が2、3頭寝そべっていた。野生の海亀をまじかに見るのは私にとっては初体験であった。

私は、さっそく海に飛び込んで泳いだ。きれいな海である。潜る。海中には見たこともない黄色い魚や青い魚の群れ。大きなヤツがやってくる。「あれは、なんだ」、見ると海亀である。まるで浦島太郎の竜宮城の風景のようであった。

浜辺でサンドイッチの包みを開ける。浜辺には、私たちの日本人一行と世話役のオマーンの2人の若い役人しかいない。あとは誰もいない。広い浜辺を独り占めにするこれ以上の贅沢のない静穏できれいなオマーン海でのひとときであった。

またマスカット北部のシーブ地区も印象の深いものだった。マスカットの中心部から車を北に走らせて20分足らず。ナツメヤシの木が群生し、下には一面の草。緑だ。砂漠とは異なり、心安らぐ風景である。

「あっ、あれは？」女性であった。若い女性たちが色鮮やかな足元までのドレスを着て、井戸で水を汲んでいた。顔も隠していない。着ているものも、黒一色のアバイヤなどではない。緑、黄、青、赤などの鮮やかな原色の服であった。

ここは他の湾岸諸国とは違う。17世紀にポルトガル人を国外に駆逐し、さらにポルトガル人を追って、その属領だったザンジバルを自国の領土としたオマーン、アフリカとのつながりが深い。ザンジバル系のオマーン人女性だったのであろう。

オマーンは歴史の古い国である。アラビア半島の東南端に位置するオマーンはアフリカ、ヨーロッパ、東アジアとの交易ルート上にあり、オマーン人は古くから外部世界と交わってきた。

オマーンの銅がダウ船で輸出されていたことで、紀元前3千年ごろのシュメールではオマーンは銅の生産地として「マガン (Magan)」という名で知られていた。紀元前2300年の石版に「アッカドのサルゴン王がディルムンとマガンからの船がいつも埠頭に接岸していることを誇った」と記録されている。バーレーンと同じく、メソポタミア文明とインダス文明を結ぶ拠点としてオマーンは太古の昔から栄えていたのである。

伝承では、現在のオマーンの主力部族であるアズド族がマリク・イブン・ファヒムに率いられて、イエメンからオマーンに移入したとされている。1世紀末のマリブ・ダム崩壊や親族内のトラブルが原因とされる。オマーンの現王家はこのアズド族の流れを汲む。

その後オマーンには、ジュランダー朝、ナブハーン朝、ヤアーリバ朝、ブーサイド朝と王朝が興隆したが、ジュランダー朝で預言者ムハンマドが存命中の630年にオマーンはイスラムに帰依している。また、シンドバッドが船出したとも言われているソハールが「世界の商業地」として大いに栄えた。ヤアーリバ朝では、1650年に1507年以降マスカットを中心としたオマーン沿岸を占領してきたポルトガルを破り、マスカットを奪回し、その後東アフリカのモンバサやザンジバルを支配下に置いた。

この王朝の後半期になり後継者を巡る内紛が国内の南族と北族系の2大豪族を巻き込んで広がり、オマーンは分裂状態になった。その時にイマームがペルシャに援軍を要請したことから、マスカットやマトラをペルシャに占領される羽目になった。

当時ペルシャの攻撃に唯一耐えていたのが、ソハール城を守っていたブーサイド朝の始祖のアフマド・イブン・スルタンであった。

彼は優れた勇気、旺盛な気力、進取の気性をもつ、寛容な人格者として知られていたが、その後ペルシャを駆逐したことで、イスラム教イバード派住民の支持を得て1744年(年次については諸説あり)にイマームに選出された。

アフマドは40年間の治世の間に反対勢力を抑えて国内を統一するとともに、対外的にもオマーンの勢力拡大を図った。バスラからペルシャ人を放逐し、インド西海岸の海賊の殲滅を果たした。平和時にはインド、ペルシャ湾岸、紅海岸、アフリカ東岸を結ぶ交易を進め、国は大いに栄えた。

ブーサイド王朝の治世は現在のハイサム国王に引き継がれており、ブーサイド朝はアラビア最古の王朝となっている。アラブ全体でも、モロッコ王室に次ぐ長さである。

この後オマーンを統治した始祖アフマドの孫にあたりブーサイド朝の第6代目の統治者であるサイド・ビン・スルタン(「サイド大王」ともよばれる)の時代には、オマーンはインド洋を英国と2分する海洋帝国として繁栄を謳歌した。

その治世は1804年から1856年までの半世紀以上に及んだが、サイドは英国との間に構築した密接な関係を背景に、その勢力をインド洋やペルシャ湾、アフリカ東部に及ぼした。第4代目の統治者の時に版図に加えたパキスタンのグワダル地方やザンジバルの他、湾岸でも、バーレーンが一時期オマーンの統治下に入り、ペルシャのバンダラアバスもオマーンの影響下に入った。

サイド大王はとりわけザンジバルが気に入り、ここをマスカットと並ぶ第2の首都と

し、ザンジバルでの丁字の栽培および奴隷貿易などによって巨万の富を手に入れた。当時オマーンの影響力はアフリカ東海岸のみならずコンゴにまでも及び、ブーサイド朝の繁栄は絶頂期を迎えた。

サイド大王の時代、オマーンは英国のビクトリア女王とも誼を通じ、1833年には米国と通商友好条約を締結、1840年にはアラブ諸国としては初めて米国に友好使節団を派遣した。使節団を乗せた商船「スルタナ号」は同年4月にニューヨークに到着し、アラブ世界で最初にアメリカを訪れた船となった。

日本で言えば、天保の時代（1830－1843年）で、開国はまだまだ先という時代のことである。

サイド大王が1856年にマスカットからザンジバルに帰る船上で、62歳で急死すると、同行していた息子たちと異母兄弟であるマスカットにいた息子たちの間に後継者問題が起り、英国の仲介によってオマーンはザンジバルとマスカットに2分された。

富裕なザンジバルの分割、これに続くオマーンの国内政治の混乱、1862年の英国蒸気船就航によるオマーン船舶の競争性の喪失、1873年の奴隷貿易の廃止などによって、オマーンの海洋帝国としての勢力は短期間のうちに衰退してしまい、その後実質的にイギリスの保護下に置かれるような状況に陥った。サイド前々国王の時には、鎖国をするにいたった。

オマーンが国際社会に近代国家として姿を現すには、ブーサイド朝第14代目に当るカブース国王の登場を待たねばならなかった。

カブースは1970年5月に叔父ターリックからの協力を取り付け、同年7月23日未明に宮廷クーデターを執行して、政権を担った。

私が訪問した当時は、各国から国として認めてもらい、アラブ連盟や国連への加盟を果たし、国内の政治・行政機構の整備が緒についてまもなくの時であった。近代国家にすっかり生まれ変わるのはまだ先の時であった。

このオマーンにも明治13（1880）年に日本人が訪れている。「吉田正春使節団」に加わった陸軍工兵大尉の古川宣誉である。古川は吉田らと軍艦「比叡」で品川を出発したが、吉田らが香港で郵船に乗り換えてからも、ボンベイまで「比叡」に搭乗し続けた。ボンベイで「比叡」と別れ、単身郵船でブシェールに向かう途中、マスカットに立ち寄った。同年6月25日のことであった。9時間弱の滞在であったが、英国領事館の案内で市内を見物している。

なお、司祭になろうとローマ目指したペトロ岐部がゴアからローマを目指した途次、下級水夫として1619年の秋頃にマスカットに着いたとも言われている。ただ、記録はまったく残っていない。したがって、古川が記録上オマーンを訪れた初めての日本人であった。

3-3 カイロ・バクシーシーでのお出迎え

私と小川はニチメンの人たちとはバイルートで別れ、エジプトに飛んだ。初めてのエジプト訪問。丸善石油からカイロ・アメリカ大学にアラビア語の研修生を送り込むための事前調査が目的であった。

当時バイルートには、イギリスが外交官たちがアラビア語やアラビア文化を習得するために設立した MECAS (Middle East Centre for Arab Studies) という有名な学校があった。石油危機の勃発によって世界中でアラビア語熱が高まり、MECAS は瞬く間に満員となっていて、当時新規の学生を受け入れる状態にはなかった。そこで、派遣先としてカイロの学校を調査することにしたのであった。

因みに、MECAS は 1944 年にエルサレムに設立された。1947 年にバイルート郊外に移されたが、バイルート内戦によって 1978 年には閉鎖に追い込まれている。この間、MECAS には英国のみならず世界中から学生が集まり、1100 名のアラビストを輩出した名門校となった。スパイの養成機関でもあった。

バイルートからカイロまでは飛行機で 1 時間半。私と小川がカイロに到着したのは、昼近くのことであった。

空港の入国手続きカウンターらしきところに人が群れている。「あそこでよいのかなあ」と訝っていると、背広を着込んだはっこそうな男が近づいてきて、「旦那、私についてらっしゃい」とパスポートを預かろうとする。

「こういう連中は得体が知れない。どうしたものか」とも思ったが、私たちはカイロはまったくの不案内。聞いて見ると、「金を払ってくれるなら、特別に早く入国手続きをしてやる」との申し出である。

「なめられてはいけないし」と私はとりわけ鷹揚に構えて「よかろう」と男に任せると、男は通常の窓口と違う場所で入国手続きを済ませた。荷物もノーチェックで通すようにしてくれた。いきなりのバクシーシー（わいろ）の要求、いかにもエジプトらしいカイロでの出迎えであった。

ホテルはナイル河の中のザマレック島にあったオマール・ハイアーム・ホテル、市内から 7 月 26 日橋を渡ってすぐのところであった。廊下も広く、天井も異常に高い。スケールが、大きい。その高い天井に大きな扇風機の羽がゆっくりと廻っていた。いかにも世界 4 大文明の発祥の地、エジプトらしい雰囲気であった。

翌日、私はカイロの町に出た。中東第 1 の都市だけのことはあった。テヘランよりも道路が広い。人が多く、より混然としていた。車道には市電、バス、乗用車、荷馬車、ロバに乗った人びとが行き交う。その市電はオンボロ電車、バスも乗用車もよく走るなという感じの旧式なもの、人々は車のへコミなどを気にする様子はまったくない。オンボロ市電やオンボロバスには鈴なりに人がぶら下がっていた。歩道と車道は異様な喧騒に包まれていた。雑多な服装の雑多な人びと。

ハーンハリーリ市場はカイロ中心部にある有名なスーク、カイロの銀座ともいえようか。私には店や人の多さより、何よりも空中に舞っていた土ぼこりや塵の印象が強かった。塵の中に馬糞も混じっているのは間違いなかった。カイロならではの風景であった。

その夜私は小川と別れて、当時日本大使館に勤務していた日本有数のアラビストの埜治夫書記官の招待で鳩料理の店に出かけた。私が知人の中東経済研究所研究主幹の小山茂樹の依頼で、埜さんに荷物を届けたお礼に夕食の招待を受けたのだった。

その店は、カイロを代表する鳩料理店のようであった。道路から門の入口を入ると、暗がりの道が続いた。そこを抜けた広場がレストランであった。ナイル河から一段高いコンクリートの岸に沿って椅子を並べてある野外のレストラン。悠久のナイル河の流れ、対岸の町明

かり、河を行き交う船を見ながら、カイロ名物の鳩料理をいただく趣向であった。頬をなでるナイル河の夜風が心地よかった。鳩料理も初体験であった。

アラブ熱に浮かされていた私は、「今夜は高名な塙さんにお目にかかれる。アラブの話がたくさん聞けるぞ」と楽しみにしていた。鳩を食べていると、どこからともなく猫が集まってくる。猫にも分け与えたり、追っ払ったりするのもカイロらしい体験であった。

「塙さんのように、ずっとアラブのことを勉強されているのは、アラブがお好きだからでしょうね」と私が訊ねると、「いや、好きじゃないですね。おおっぴらには言えませんが、知れば知るほど嫌いになっていくんですよ」と塙さん。私には、意外な答えであった。1992年にその後の塙治夫大使とオマーンで一緒することになるうとは、その時には知る由もなかった。

翌日私は「ギザのピラミッド」と「エジプト考古学博物館（通称、カイロ博物館）」を訪れた。めぼしいものは「大英博物館」にほとんど持って行かれたとはいっても、さすがはエジプト文明発祥の地だけのことはある、紀元前数千年前からの石碑や彫像などなど、とくに初めて見たミイラやツタンカーメンのまばゆいばかりの黄金マスクや棺などの埋葬品は印象的であった。

それから数年後のことになるが、当時アブダビに赴任していた私は家族を連れてカイロを訪れた。まず、家族を連れて行ったのが、ギザのピラミッド。現場に着くと、たむろしていたエジプト人たちが寄ってきた。「旦那、ラクダに乗って見学しませんか」と語りかけてきた。「ラクダなんか居ないじゃないか。俺たちはご覧の通り、4人だよ」と言う、「4人？全然問題ない。村に来て下さい。用意します。すぐそこですから」という。

村に着いてから散々待たされた挙句に、「旦那、ラクダは3頭しかいない。あとはロバだけ。1人はこのロバに乗って下さい」と、しゃーしゃーとしている。文句を言っても始まらない。仕方なしに、私が貧相なロバに乗り、妻と娘たちはラクダに乗ることになった。ラクダに乗る家族とロバに乗って一段低く写っている私の写真がいま手元に残っている。

この写真を見るたびに、私はエジプト人のいい加減さやこすからさを思い出す。初めてのカイロ空港での出来事やロバ事件以来、私はエジプト人に対しては不信感を抱くようになってしまっていた。塙さんの言葉も、カイロでのこういう体験によるのだろうと思った。

日本人で一番最初にエジプトを訪れたのは、文久2（1862）年に派遣された竹内下野守保徳（やすのり）を正使とした遣欧使節団である。1月22日に品川を出帆し、香港、シンガポール、ガール、アデンを経由して3月20日にスエズに到着し、そこから5時間余りをかけて蒸気機関車でカイロに行っている。スエズ運河の完成は1869年11月のことであるから、当時はスエズーアレキサンドリア間は汽車で移動したのであった。

その次にカイロを訪れた日本人は、文久3（1863年）に派遣された池田筑後守長発（ながおき）を正使とした遣欧使節団であった。この時もスエズからアレキサンドリアまでは蒸気機関車に乗っている。

カイロでは、両使節団員ともにピラミッドを訪れている。後者の一行がスフィンクスの前で羽織袴に陣笠姿で撮った写真は有名である。

3-4 クウェートとのLPG直接交渉 - アラブ人との初商談

1973年に勃発した第一次石油危機後には、原油供給のほとんどを中東に仰ぎ且つ供給を国際メジャーに頼れない日本の民族系石油会社8社が、石油を求めて相次いでバイルートに進出した。

オイルマネーを求めて日本から銀行やエンジニアリング会社や各メーカーも競ってバイルートに進出した。すでにバイルートに事務所を持っていた商社も、社員をニューヨークやロンドンから移動させて、その陣容を強化しつつあった。

私がオマーンとカイロの出張から帰国すると、遅まきながら丸善石油も中東の石油情報収集のためにバイルートに駐在員を出すことを決め、1974年7月に私は長期駐在の形でバイルートに行くように命じられた。

バイルート赴任の前に、クウェート政府との石油液化ガスのDD (Direct Deal=直接交渉) を行うためにクウェート入りする宮沢液化ガス部長に随行せよというのが会社の指示であった。私は、宮沢部長と、関係商社ニチメン東京の北川ともにクウェートへの経由地であるバイルートに向けて羽田を飛び立った。

早朝に着いたバイルートのホテルで仮眠をとってから夕方空港に出かけ、チェックインを済ませて待合室でクウェート行きの飛行機を待っていると、立派な身なりをしたレバノン人らしい男が前のベンチに座った。彼が開けたアタッシュケースに何気なく目をやった私は、驚愕した。アタッシュケースの中に書類らしいものは何もなく、ウイスキー瓶だけがケースの底と蓋の部分に2列にびっしりと並べてあったのである。

そこはクウェート行きの乗客の待合室だから、彼は間違いなくクウェートに行く。行き先のクウェートはイスラムの国でしかも戒律の厳しい国、酒類の持ち込みは一切出来ない筈だ。「彼はクウェートでどうするつもりなのだろう」と私は興味津々であった。

クウェートに着いて私は自分の税関検査を終えてからこの男の姿を追ったが、時間が経ち過ぎたせいか、見失ってしまった。税関で特段の騒ぎはなかったようだから、無事入国できたのだろう。どうして入国できたのだろうか、私はキツネにつままれたような気持ちであった。いま思うと、彼は税関職員と通じていたのかもしれない。それにしても、大胆な男の振る舞いであった。

わが国にとって最初のこの時のクウェートとのLPGの直接交渉には、日本からは石油会社3社と液化ガス会社1社が参加した。私にとっては、初めてのアラビアでのアラビア人との交渉の場であった。クウェート石油省の交渉相手は、米国の大学を卒業した若干28歳の王族のアリ・カリファ・アル・サバーハ次官補とエジプト人のムバラク博士であったが、イギリス人のマグドナルド氏を顧問に加えて、日本側に対して高値を提示し、一歩も引かない姿勢であった。

午前中は石油省との話し合い、午後は東京本社への報告、夕方からはクウェートのエージェントに会って石油省や競合他社のその日の動きなどの情報を入手して分析し、夜には本社に追加の報告を送った。日本とクウェートの時差は6時間だから、東京では深夜の時間である。クウェートのエージェントは現地の財閥で、次官補への人脈を使って、石油省の本音などの情報を聞き出してくれていた。

私は、それまで原油やLPGの輸入業務には関わったことがなく、商社との付き合いもほとんどなかった。このLPG交渉では東京から随行した北川がニチメンクウェート所長とともにクウェートのエージェントを通じて、クウェート石油省の情報を細かく入手してい

た。私は、商社が必ずしも直接ではなく、こういうエージェントを使って産油国と接触しているという仕組みを知った。

一夜明けた翌朝には、昨夜の私たちからの報告を踏まえて本社から当日の交渉方針についての指示が入った。この指示に基づいて折衝方法を固めては、日中にアリ次官補と交渉を続ける日々であった。日本との時差の中でのタイトなスケジュールで、私たちは寝不足の状態が続いた。

日本勢の4社はお互いが競争相手の立場であり、ホテルや石油省で会っても義務的な挨拶を交わす程度であった。会社間での情報交換などは一切なく、それだけに他社に出し抜かれはしないかと疑心暗鬼をつのらせていたが、とってどの会社もクウェートが提案する価格は飲めないという状況であった。

クウェート側は、その年の1-3月のトン当たり100ドル、4-6月の110ドルという相場に対して、130ドルを要求し、一步も引かなかった。日本側は粘り強く値下げを迫ったが、結局各社とも交渉は物別れに終わり、私たちも何の成果もないままベイルートに引き上げた。日本に帰国する宮沢部長をベイルート空港で1人見送った私は、そのままベイルートに残り長期駐在を始めた。

3-5 ベイルート駐在 - 「中東三度笠」への序曲

既述した通り1970年代のレバノンの首都ベイルートは中東のパリと呼ばれ、近隣アラブ諸国の中心地で、ここでは石油以外のものはほとんどのものを手に入れることができた。

温暖な気候、自由な生活、さまざまな商品、広範な金融サービス、高等教育や各種情報、近代的な医療、西欧ファッション、レジャー、各国料理などなど、当時の湾岸諸国にないものがすべてであった。

そこには緑の山々があり、コバルトブルーの地中海が広がっていた。近郊の山に車を走らせると、緑の木々の間に赤やオレンジの別荘の屋根が点在し、ゴージャズな雰囲気をも出し出していた。

「同じ日にスキーと水泳が楽しめる」というのがベイルートのキャッチ・フレーズで、冬場には、午前中に山でスキーを、午後は地中海で水泳を楽しむことができた。

また、当時ベイルートは交通の要衝で、イラクや湾岸諸国行きの飛行機のほとんどがここから飛び立ち、湾岸諸国からの飛行機のほとんどがここに到着していた。

そして、緊張を強いられた産油国への旅からベイルートに戻ると、解放感で心身の疲れが一気にはがれ落ちた。

ベイルートを初めて訪れた日本人は、明治23(1890)年にジョンズ・ホプキン大学で博士号を得て帰国し、東京専門学校(早稲田大学の前身)や慶応義塾大学で教鞭をとった後に外務省に移った家永豊吉であろう。家永は外務省在勤中に台湾政府の最重要施策であった阿片制度関係の調査の命を受けて明治32(1899)年からインド、ペルシャ、トルコ、エジプトなどを視察して明治33(1900年)に帰国した。家永は、その途次の明治32(1899)年にレバノンのトリポリに着いている。

その時から75年も前にここにきた日本人がいるのだとの感慨にふけりながらのベイル

ート駐在生活の始まりであった。

私は滞在先として、イランでの経験を踏まえて、超高級ホテル街からやや離れた裏通りの小さなホテルに決めた。小規模ホテルの方が家族的で長期滞在には居心地がよいのと、私が長期駐在中に机を置かせて貰うニチメンの事務所に徒歩で通える距離にあることもその選択の理由であった。ホテルの名前は、「エクセシオール」。図らずも、このホテルがアブダビ石油の利権交渉に当たった丸善石油先輩の杉本茂がバイルートでの交渉時に陣取ったホテルであると知り、感慨もひとしおであった。

港に近いニチメン・バイルート事務所では20人近くの日本人と10数人の現地人が働いていたが、私の世話をしてくれることになったのはアルメニア人のアヌーシュ嬢。年齢は24歳。アルメニア語の外に、英・仏・アラビア語も出来るマルチ・リンガルであった。背丈も日本人女性と変わらず、心根がやさしく細かい気遣いをする女性であった。アルメニア人は、日本人のセンチメントにピッタリと合う。

アルメニア出身の人の苗字には、「ヤンやアン」がつくものが多くみられる。ミスター5%のグルベキアン、かつてソ連の第一副首相を務めたミコヤン、世界的な指揮者のカラヤン、有名な作曲家のハチャトリアンなどはアルメニア人である。

昔アルメニア人が、「日の出ずる国」であることを誇り、西欧諸国の人びとに対して「日の出る国」から来たと述べていたと聞いたが、聖徳太子が中国に「日の出ずる国の天子、日の没する国の天子に云々」と書を贈ったのと酷似しているのも面白い。

このアルメニア人は、古くから「商売上手」、「手先が器用」、「勤勉さ」で知られており、この点でも日本人と似通っていた。

1973年の初めての湾岸諸国への旅の途次バイルートに立ち寄った時に会ったアルメニア人の土産物屋の親父から、「私はロシア語、トルコ語、ペルシャ語も含めて7ヶ国語ができるよ」と聞いて度肝を抜かれたが、その親父の話も強く記憶に残っている。

その時に彼は、「俺たちアルメニア人はユダヤ人とは違うよ。ユダヤ人は石を拾ったら、それをどうやってカネに換えるかを考える。俺たちアルメニア人は拾った石の美しさを精一杯表現するためにどう詩に詠もうか、どう絵を描こうかを考える」と話した。

「へえー、同じ石でカネと芸術か」と中東へ来て初めて会ったアルメニア人の優雅さに、私は感心したものだった。そう言えば、日本人も古くから和歌を詠み、絵を描くなど芸術心では負けてはいない。よく似ている。

このアルメニア人は古い歴史を持つ民族である。メソポタミアの一部であるアルメニア高原が起源で、アルメニア商人たちは有史以来チグリス、ユーフラテス河を下ってのメソポタミアとの交易によって栄えていた。最初にキリスト教を受容した国民としても有名である。その後の歴史の変動によって、アルメニアの人々は、ロシア、イラン、シリア、レバノン、さらにはヨーロッパ、アメリカなど世界各地に散らばっている。

国家としては1991年に旧ソ連邦から独立した日本の13分の1の面積の「アルメニア共和国」があるに過ぎないが、民族としてはそのアイデンティティを持ち続け、固く団結している。

私は、オフィスでの補助業務、アラビア語の特訓、バイルートの生活情報などに心をこめて協力してくれるこのアヌーシュ嬢を頼りにバイルート生活を始めたが、やがて石油を求めてアラビア諸国を駆けめぐることとなった。

ベイルートからサウジアラビアへ、イラクへ、リビアへ、またアブダビ、カタール、バハレーン、イランへ、ベイルートとクウェートとの度重なる往復など体当たりの中東の旅が始まったのであった。合羽からげての「中東三度笠」ともいうべき旅であった。

主な参考文献：

「石油はいつなくなるか」(小山茂樹、時事通信社、1998年)

「証言第一次石油危機、危機は再来するか」(電気新聞編、日本電気協会新聞部、1992年)

「狼がやってきた日」(柳田 邦男、文春文庫、1982年)

「アブダビの昔話ー或るオイルマンの体験記」(吉田 祐司、講義録、2001年)

「新アルメニア史」(佐藤信夫、泰流社、1989年)